

サマリートーク

田中 一

昨年ではまとめの部分がサマリートークになっていました。サマリートークのスピーカには、都合のよい点と悪い点とがあります。まず悪い点ですが、朝から一日中気を許さずじっと真面目に聞いていなければなりません。今回のシンポジウムは、昨日今日の一日半で、それほどではありませんが、これが国際会議ともなると何日も何日も続きます。大変です。もっとも、スピーカにとって都合よい点もあります。通常サマリートークの後には質疑をしないことになっており、何を言うかと切り捨て御免で、私もたびたび被害を受けたことがあります。その反面、する側に立つと何とも気持ちが良いものです。いう迄もなく、今日はそのような特権を行使する積りなど全くありません。

まとめの視点 独断その一

今回のシンポジウムでは、非常に多岐にわたる面白い話が沢山ありましたので、これを纏めるとなると大変ですが、狩野さんの方からのお許しもありましたので、全く独断と偏見に基づいて行うことにいたします。

纏めには視点が必要です。視点としては、個別科学を個別科学たらしめる諸条件をとることにします。考えてみますと、昨年の夏に始ったこの一連のシンポジウムの狙いは、社会情報学がやがて学的体系をなし得るものなのか、もしなし得るとすれば、それはどのようなものなのかを詰めていく所にあります。

す。社会情報学も一つの個別科学でありますので、このような狙いに対しては、個別科学が具備しなければならない条件を見据えなければなりません。

字引を引きますと、個別科学を成立させる条件は、対象と方法ということのようです。それだけでは充分でないというのが私の意見です。最近では同じサンプルに対して、同じ方法で進めるという研究が、しばしば工学と理学の双方で行われています。しかしながら、そのようなときでも工学的論文と理学的論文とは、論文としての条件が違います。例えば、サンプルが同じでも、工学的論文では如何に有用なものを作り上げたかという点が評価の対象になりますが、そういう点は理学的論文となるとさっぱり評価されません。

つまり、仕事を仕事と評価する評価体系が個別科学毎に形成されていて、その評価体系が個別科学毎に違うのです。個別科学を特徴付けるのは、対象と方法にさらに一つ加えて評価体系の三つと思います。総合科学でも、ただ幾つかの分野の科学が相寄っただけでは、個別科学になりません。これらが互に相寄り、その結果、独自の評価体系が形成されるようになったかどうか、その辺が総合科学が個別科学としての総合科学になるかどうかの分かれ目だと思います。

したがって、二回に亘るシンポジウムの全体で、社会情報学の対象と方法および評価体系に関して、どのような前進がなされたかということ、まとめの視点としてとるのも一案と思うのです。この辺までは、格調高く

見えるのですが、後はどうでしょうか。

昨年では

先ず昨年の復習をします。簡単に申します。私の報告は「存在」に関するもので、趣旨は以下述べるものでした。情報過程というものは決して単一のものではなく、一つ一つ質的にも異なっていながら、全体として層的關係を形成して層序を作っており、今の所、層序の一番高い位置に脳髓の情報過程が位置しています。このことは容易に想像できる所です。しかしながら現実の事態その他を考察すれば分かるように、さらに質的に高い情報過程が存在しなければならないように私は思います。このあたりは割合オーソドックスな筋道と思うのですが、それを、啓蒙的講演に出てきそうな以下のお話で補って、その「存在」について論じました。

図1はオーソドックスな筋道の部分です。層序を構成するこの図の一つ一つの情報過程は、今回の堂下さんから詳しいお話があった図2（再録）とよく対応しているように思います。とくにどの点が対応しているかは今回のシンポジウムに触れるところで申し上げたいと思います。つぎに啓蒙的な補足の部分をつけ加えます。

図3のSGUは勝手

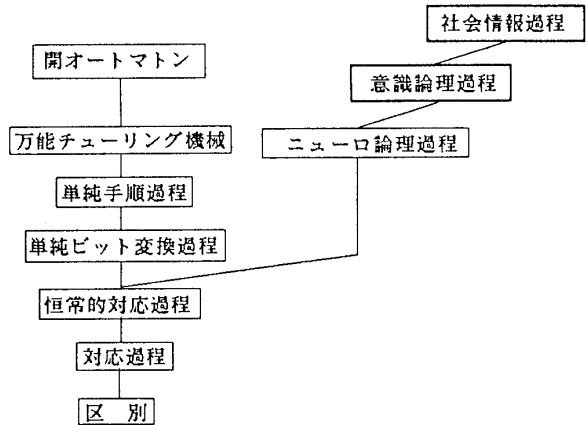


図1 情報過程の層序
質的に異なる情報過程の論理的系列を示す。

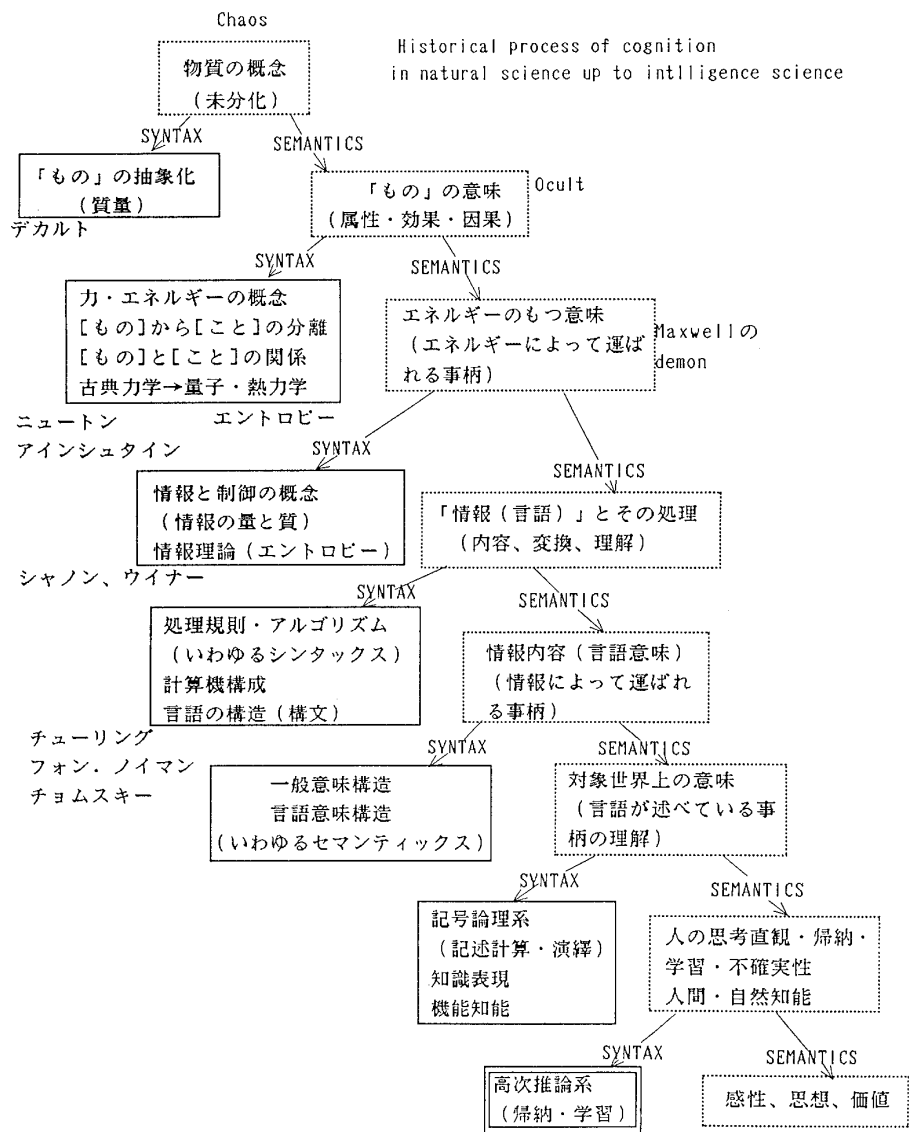


図2 シンタククスとセマンティックス (堂下図)
カオス的狀態の物質から出発し、各段階でシンタククスとセマンティックスの二つが分岐することによって、全ての情報と全情報過程が生成することを示す。堂下がその報告に用いたもの。

S G U

=個人の知的活動量

÷

ニューロン1個の

活動量

社会情報過程

=個人の知的活動量

× S G U

図3 S G U単位の説明
情報過程の質的量的相違を表す単位

に導入した単位として、私達の脳髄全体が行う情報過程の、質と量の両面にわたる活動量が、1個のニューロンの情報過程の全活動量の何倍に当たるかを表すものです。S G Uは札幌学院大学の略称ではなく、Super Great Unitの頭文字を取ったものとしておきます。さて、世界全体の人口は一人のニューロンの数に匹敵いたします。したがって、世界の人が協調的になったとき、そこに展開される情報過程の活動量は、一人の脳髄の全活動量のさらにS G U倍の規模になり得るのではないのでしょうか。このことを指摘し、それこそが社会情報過程ではないかと申しました。個々の人間の情報過程は実に奥深く窺い知れないほどのものですが、それにも拘らず、決してこれが最高の情報過程ではなくて、社会情報過程の可能性は、個々の人間の情報過程を質的にも量的にも遥かに超えた、S G U倍の情報過程になるのではないのでしょうか。このように、社会情報学の対象について論じました。

吉田民人さんは、大変熱のこもった報告をなさいました。吉田さんは、社会情報過程を単にマスコミュニケーションに限定して論ずる例をよく見るが、そのような仕方は狭い考えであって、これは情報過程を自然言語を媒介とするものに限るところからくるものである。情報概念を広く捉えることによって、始めて情報現象を包括的に把握することができる。と強調され、つぎにこの見地に立って、情報を最広義、広義、狭義および最狭義の4段階、すなわち物質のパターン一般、生物の誕生とともに出現した、あらゆる進化段階の生物に関わる情報現象、人間レベルの有意味の記号集合一般および自然言語としての情報の4つに定式化されました。さらに、認知、指令と評価のカテゴリーを用いて多様な情報変換を特徴付けるとともに、これら情報変換と3個のカテゴリーとの上に立って、さきの情報の四段階を論じられました。吉田さんは質疑の中で、特徴付けられ定式化された情報変換と情報概念に基づき、社会情報学に対し以下の指摘をなさいました。

「人類社会全般の中で、今規定した意味での情報処理過程がどういう役割を果たしているか、そしてそれをどう見るかという点を解明するのが、私の考える根元的な社会情報学である。」

また、最初の報告で、福村さんは情報社会の持っている問題点を指摘されました。すなわち、情報または記号の意味それ自身が多様であることに発し、情報社会ではこの多様性が一つの社会的様相を齎すようになってくることを指摘されました。私の造語なのですが、福村さんの社会的様相を情動的疎外であると表現してはと思います。

この造語の意味を説明するために、図4の絵を書きました。社会には、図4のように、人と物の双方が沢山存在します。これら人と物とに関する情報を捉え、またそれらを交換する場合、情報社会では直接行うのではなく、

情報エージェントを通すことが普通になってきます。ところが、情報エージェントが捉える人と物とに関する情報とその元である本体との間には、常に間隙が存在します。なぜならば、まず人と物との在り方はきわめて複雑で、実際は情報の表現に際して、つねにその複雑さを便宜的に単純化します。一方単純化した結果を表現するための情報あるいは記号を用いるときには、もともと多義的なものにも拘らず、多義的な意味の内の一つにのみ限定して用います。多くの情報エージェントは、この単純化した一義的な情報を互いに交換しています。これが社会の情報過程となっていきます。私達は、いつも、この情報エージェントを媒介にして情報を交換し、またこの情報に基づいて行動しています。

さて今述べたように、情報エージェントが捉える情報と情報源である人と物との間には、いつも埋めることができないギャップが生じています。情報社会では、本体であるはずの人と物とは別物の情報エージェントの情報で、本体に代って主役になっていて、逆に本体の方は舞台から消えてしまいます。福村さんはこのような事態を指摘されました。余り適切な言葉ではないかと思いますが、私はこれを情報の疎外と表現しました。

このように、第一回のシンポジウムでは社会情報学の対象やそのデッサンに加えて、さらに問題点が論ぜられたといえましょう。

したがって、いまや第二回のシンポジウムのステイタスは明らかです。すなわち、今回

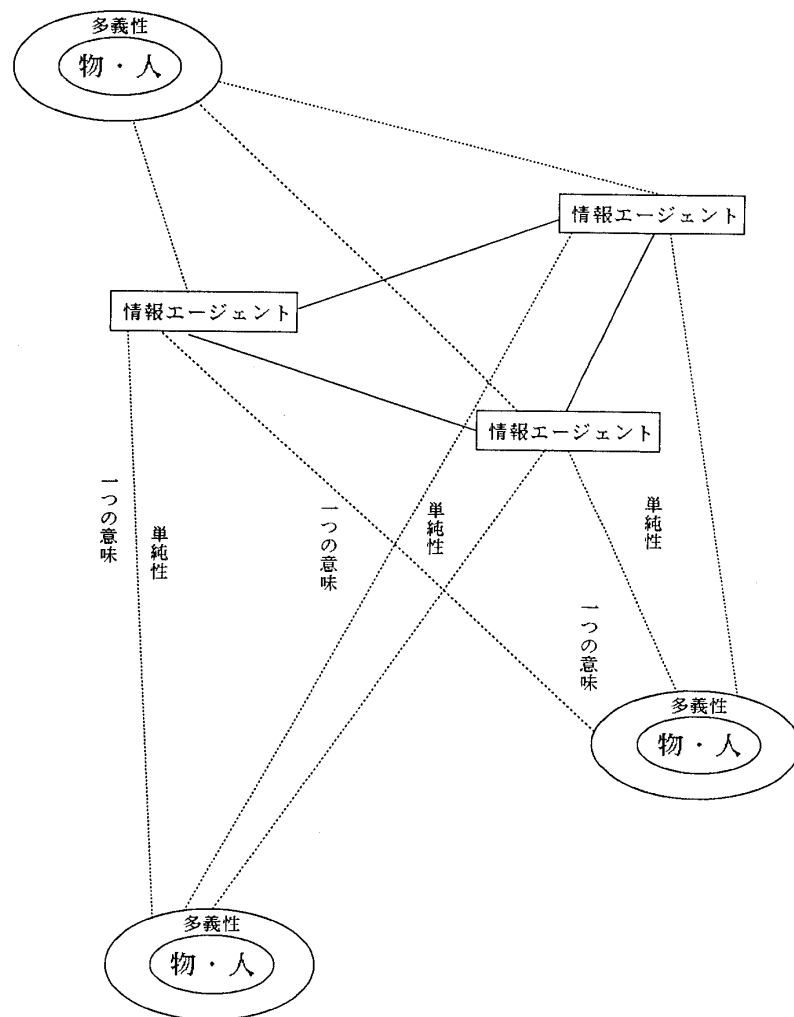


図4 情報エージェント
情報社会の情報を媒介する存在すなわち情報エージェントの役割を示す。

のシンポジウムに期待しているところは、社会情報学の対象をより明確にし、その方法を浮上させ、さらに可能であれば、評価体系の形成にどう資するかという点にあります。以上を第二回シンポジウムをまとめる私の視点といたします。

堂下さんから

先ず堂下さんの報告です。堂下さんが報告されたところは、昨年の情報過程の層序構造ときわめてよく対応していることに大変強い印象を受けました。堂下さんは、情報過程の

各段階がシンタックスとセマンティックスに分離して行き、さらにそのセマンティックスが同様にシンタックスとセマンティックスに分かれて行く。これを繰り返して、各段階の情報過程が生成していくことを示されました。昨年報告で、私が仮説的に述べたところ、すなわち情報過程を実在的過程と論理的過程とに分けた論を、内容豊に精密に展開されたように思います。個々の情報過程もまたよく対応しているよう感ぜられました。

昨年報告では私もこれこそかなり独断的かと思ひ、討論の中では福村さんが間接的に異論を出されたように感じた部分があります。それはニューロシステムの位置付けについてです。コンピュータによる通常の情報処理は、一次元に並んだ記号情報の処理といえるかと思ひます。一方、ニューロシステムの方では、多次元構造をとるビット情報を、多次元構造を保ったまま処理して行きます。つまり、ニューロシステムでは、多次元構造情報を構造体として処理していくように思ひます。したがって、このニューロシステムは、情報処理システムとして、通常のコンピュータの情報処理方式と質的に異なるものでないかと考へ、このことを仮定して層序論を展開したのです。堂下さんの場合では、それが記号とパターンとの対比という形で述べられているように思ひました。

以上のようにみてきますと、昨年報告で、社会情報学の対象の存在の根拠を論ずる際に用いた仮定が、堂下さんというプロ中のプロの報告によって一層強固になって、社会情報学の対象の存在性が、一段と鮮明化したように思ひます。以上は私の錯覚かもしれませんが、錯覚もまた、これを覚える当人にとっては楽しいものです。

平野さんから

つぎに、平野さんの報告です。平野さんの報告は、私にとって少々分かり難いところも

ないわけではありませんでした。市民共有のネットワークの形成ということが情報社会にとって非常に重要であることを指摘されたように聞きました。これに関する事として、情報のセントラリゼーションについて、昨日と今日の二日に亘り討論が白熱化しました。例えば堂下さんは、情報が持つ固有の属性のため、私の言葉を用いれば、情報の内在性のため、情報がセントラリゼーションの一面を持つことはまことに避け難いことであって、これをコントロールするのは社会の側の問題であることを述べられました。これに対し、戸田さんと平野さんからは、各個人の問題があることを強調されました。これらのご意見を受けて、多くの方が発言されました。討論は、技術への要請は社会からなされるべきもので、技術はその要請があつて始めて進展していくというご意見と、技術者の側にも何らかの責任があるのではないかという、二方向のご意見が多くの方々から出ました。その間に、「美への欲望」すら権力側の装置として形成されているという構造があつて、ということもよく見るべきであるという意見も出ました。これらの討論の後、情報に関して生じてくる問題には社会学者も責任を感じていること、また、技術者の方には技術の倫理を考へねばならないという意見が交わされているという発言もあつて、この討論は、シンポジウムにふさわしく、まことに「良識的」な結末を迎えたようです。

歴史について 独断その二

さて、ここに一つの課題が潜んでいるように思ひます。それを論ずる手がかりとして、学生が私達によく発する質問に注目することにします。その質問とは、皆様も経験されたところと思ひます。「未来はコンピュータが人間を支配する世界になるのでしょうか」、あるいは、「人間がコンピュータを支配する世界に

なるのでしょうか」というものです。この問題に答えようとするところに、上記の討論課題を解く鍵があるように思います。

学生からの質問、あるいは上に述べた討論課題を解くための基本として、一つの問題を提起します。それは、歴史に関する見解です。果たして歴史はその展開が予め決まっているのか、私達人間はそれを知らないだけであるのか、あるいは、歴史は人類がその瞬間瞬間を創造しているものなのか、ということです。端的に言えば歴史は既定か創造かということです。この基本的な問題が、技術を巡ってなされた討論に深く関わっているように思います。

もし自然科学者としてこの基本的な問題に発言し得るとすれば、それは偶然性が実在するか否かに関する部分です。何となれば、もし偶然性が実際は実在せず、私達に偶然と見えるものも、ただその複雑な決定過程を複雑さの故に知り得ないだけであるとするならば、意志決定もただ言葉だけに終わってしまい、天を仰いで長嘆息するのがせいぜいなし得ることであり、情報社会の問題点など論じても意味ないことになってしまうからです。

私は物理学者です。上述の偶然性の実在という問題を考察するときにも、その手がかりを、古典論と量子論の二つの見地から求めることになります。

古典論の見地に立つと、自然は決定論的に推移するよう見えます。実際ニュートンの力学では、現在の瞬間の状態が定まるとつぎの瞬間の状態は一義的に決ってしまい、これが次々と繰り返されて、結局のところ、未来永劫に亘って、全物質の状態が一義的に決ってしまうことになるからです。つまり、現在の状態が確定している以上、未来永劫に亘って物質の状態は確定することになります。

ところが、最近のカオスの議論をみると、このような結論に多少なりと注釈をつけ加え

た方がよいのではないかと思います。それは、以下に述べるように、偶然的に定まってくる経過もまた必然的に導くことができ、かつ、その根拠が空間と時間の連続性にあるため、このことが広く成り立つようにみえることです。

以下の例は、ご存知の方も多いかと思うのですが、今賽子を振って出てくる目が1から3のときAを、また4から6までであればBを記すこととし、何度となく賽子を振ります。こうして得られるAとBとの列は、偶然的に決まった記号列です。このことに疑念を抱く余地はないでしょう。

つぎにこれと全く別の方法で、AとBとの記号の列を作ります。それには、図5を用います。図5を見ると、正方形のなかに二等辺三角形と左下の隅から右上の隅に対角線が引いてあります。以下この図の使い方を説明します。

正方形の下辺上のどの点でもよいのですが、図5では x_0 から出発します。 x_0 から上方に辿って、三角形の二辺のどちらかに中れば、90度方向を変えます。このとき三角形の外に出ないようにします。次からの軌跡の辿る道は次のルールに従います。

1. 左の斜辺に中れば右方向に90度曲がる。
2. 右の斜辺に中れば左方向に90度曲がる。
3. 左半分の対角線に中れば上方に、右半分の対角線に中れば、下方に曲がる。

要するに、2回目以後は時計の針の回り方にしたがって、斜辺か対角線に中れば、90度ずつ方向を変えていくのです。上下の方向に動くときの折線の位置は、下にまで垂線を下ろして読み取ることができましょう。この位置を表す数の列を

$$x_0, x_1, x_2, \dots$$

とします。これらの値が0.5以下であればA、それ以外るときBとします。このようにして

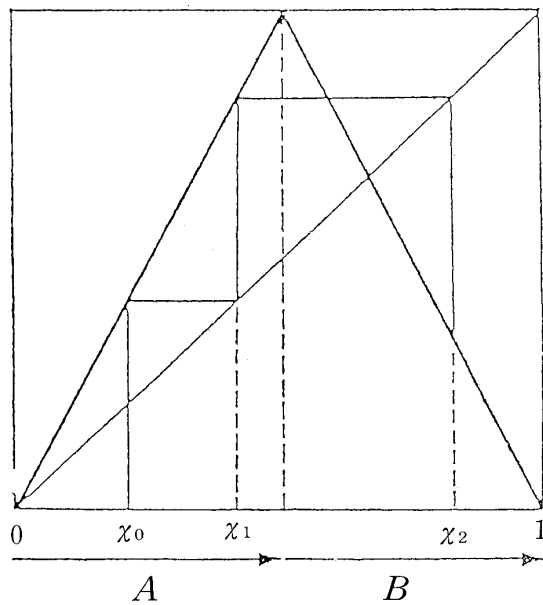


図5 記号列A Bの決め方

横軸上の任意の点から垂線を立て、三角形の斜辺と交わる点で三角形内に横軸に平行にはしり、以後は2つの斜辺と対角線と交わる点で右回りに直角に折れる。このとき縦方向に走る線の横軸上の足が0.5よりも左にあればA、右にあればBとすればA Bの列が得られる。0.5の点はどちらでもよい。

出発点である x_0 を決めると、AとBの記号の列が一義的に定まってくる。この意味で、図5を用いた記号列は必然的に決定されたものといつてよいでしょう。

話の要点は次の点にあります。すなわち、賽子を用いて偶然的に得られるA Bの記号列と全く同じ記号列が、 x_0 を適当に選ぶことによって、つねに再現することが可能であることです。すなわち、疑いなく全く偶然的に定まる記号列を、疑いなく全く必然的なものとして導くことがつねに可能なのです。

図5による説明には、些か晦渋な点もあるかと思いますが、この方法を用いると、A Bの記号列の生成が必然的過程であること自身については、お分かり頂けたのではないかと思います。やや大ざっぱにいえば、この事例は、偶然性と必然性の一致を意味していることとなります。

これは多少ともいい過ぎの感がありますが、「必然性を偶然性として受け取る」といえば少々和らいだ捉え方になります。このこと

が図5の下辺の連続性、すなわち直線あるいは線分の連続性に基づくことに留意して、時間と空間の連続性に想いを致せば、たとえ歴史が必然的に定まっているものであるとしても、私達はこれを偶然と受け取り、これに疑いを挟むことなどないのではないのでしょうか。

次に私達が量子論の見地に立ったとします。このときには、比較的容易に偶然性の実在性を認識することができるように思います。

今放射性物質があって、半減期だけ時間が経過したとします。このとき、放射性物質の原子核の半数が他の原子核に変わっています。しかしながら、どの原子核がそのまま残り、どの原子核が他の原子核に変わるのかを予め知っておくことはできません。これは技術的にできないのではなく、原理的にできないのです。この原理的不可能性こそ、放射性物質の崩壊現象のなかに偶然性が間違いなく実在することを意味しているのです。このことは、放射性物質の崩壊現象に限ったことではありません。原子分子などのミクロの現象一般に共通することです。この意味で、全てのこの世の現象の根底には、偶然性が実在しているといつてよいでしょう。とくに細胞内諸現象やニューロンの情報過程では、ミクロの状態がマクロな状態と直接的に結びついていますので、この偶然性を、人間社会の進行の重要な契機として考慮すべきではないかと思われまふ。

このようにして世界の根底に偶然性が実在することをみた以上、私は歴史を運命決定観から観ることを否定し、歴史は創造であることを強調したいと思います。これとともに、今や先の学生の質問に答えることができます。

学生は、「コンピュータが支配する世界になるのでしょうか。あるいはまたコンピュータを支配する世界になるのでしょうか。」と尋ねまし

たが、この質問のとき、質問者は自分を第三者の立場に置いて、世界の進行をじっと眺めているという姿勢を取っています。質問の姿勢がそもそも問題なのです。歴史は創造なのです。堂下さんもたびたびお話になったように、技術的にはどちらの世界を作り出すこともできます。したがって、いかなる世界を創造するかが問題なのです。私達の問題に返れば、どのような社会情報過程を作り出すかが問題なのです。すなわち、社会情報学が対象とする社会情報過程は何かという問題は、どのような社会情報過程を作り出すべきかという問題になりましょう。こうして、私達は社会情報学の研究方法の柱を見い出したこととなります。

戸田さんから

これに関して、堂下さんが強く訴えられたことがあります。それは「切り取り輸入型の文化を如何に脱却するか」ということです。最後に戸田さんが「感情について」報告して頂きましたが、その内容は、この点について非常に示唆的であるように思いました。このことを論ずる前に、戸田さんの「感情アージュシステム」について若干述べることにします。

戸田さんの報告を聞き、私はこの理論が、生物と人間行動の双方を包括的に理解させるもののように思いました。ご出席の心理学の複数の専門家からは、幾つか専門的な質問が出されました。今のところ、心理学の専門家の全てがこの説を受入れておられる事情にはないことを窺わせました。しかしながら、私自身は、戸田理論の包括性に強い印象を受けました。

どのような新しい理論でも、既成の理論を用いて、新理論の一部に代わらすことができます。したがって、新しい理論の成果の一部を既成の理論で代用させ得たとしても、このことを新しい理論の逆評価の根拠として用いることにやや疑問がありましょう。この点に

関連して、包括的理解を与えるということの重さを強調したいと思います。

また基本にとった「恐れ」のアージの分析の緻密さや、アージシステムの形成時である野生環境と今日の文明環境の違いによる感情の機能の相違など、私にはきわめて興味深い話でした。そして、これこそ堂下さんが指摘された「切り取り輸入型の文化を如何に脱却するか」という設問に対する一つの答であるように思いました。

戸田さんの理論は、包括的なマクロの議論ですので、この理論に基づいて歴史上の事象の詳細を再現できる筈はありません。歴史上の事象の理解には、感情アージュを要因の一つとして取り扱うべきでしょう。

さて戸田さんの理論から、現代および今後の社会に関する大切な課題が浮かび上がってきたように思います。戸田さんは野生環境で発生した感情アージュシステムが、環境の変化すなわち当初の野生環境から文明環境に移行していくのに伴って、その適応性を一部失うに到ったが、このことのために、現在の社会生活のなかにあっても、感情が積極的役割を果たしていることを見失い勝ちであることを強調されました。

一方堂下さんと平野さんのお二人や多くの方が指摘されたように、現在はグローバルなネットワークが形成された新しい文明環境にあります。この文明環境を仮に現代文明環境と呼ぶことにします。現代文明環境の特徴がネットワーク形成に尽きるものでないことはいうまでもありません。

このようにして、戸田さんの所論から社会情報学の重要な課題が一つ導かれてきます。それは「現代文明環境下における感情アージュシステムの適応性」ということです。このように設定した課題は「如何なる社会情報過程を作り出して行くべきか」という先述の課題に貴重な示唆を与えるでしょう。

輸入と創造

さてここで、最初の問題提起に戻ります。それは、堂下さんが強調された、「切り取り輸入型の文化を如何に脱却するか。」という課題です。戸田さんの報告によれば、暫らく前までは、「感情」は科学研究の対象になり得ないもの、科学研究以前のものと見られていたということです。これに対して現在では、生物と人間行動に対する包括的理解をもたらすものになっています。ここに輸入型を脱却した例があり、私達はここから示唆を読み取ることができると思います。

堂下さんはまだ「知能」が必ずしも研究の対象とは考えられていないと仰いましたが、如上の所論からすれば、まず積極的に研究の対象に考えていくべきではないでしょうか。つまりタブーを打ち破っていくことです。

また、社会情報過程について研究していく場合、「自分の考え」を大切にしていく必要があるのではないのでしょうか。これは日本の人文科学、社会科学と自然科学の何れの分野の研究にとっても、大切なことと思います。今更のように聞こえる言葉ですが、次のようにいい替えると、多少異なる印象を与えます。

評価の高い外国の考え<<自分の考え

この不等式は社会情報学の今後にとって、まことに大切な思想と思います。

外国の評価高い思想というものは、絶えず現れます。したがって、これをただ追い駆けているのでは、死ぬまで追いつけても、間に合いません。

外国の評価高い思想の例として、トフラーの「第三の波」を読みました。印象的だったのは、この書のなかには、この書が誰だれの思想に基づいてと一言も書いてなかったことです。

このような考えに対して、今までは以下のような反論が提出されてきました。「研究の現状を見れば、ここ暫くは、外国の研究者の成果を学んで追いつくようにするのが先決であ

る。」つまり、まず追いつき、しかる後に追い越すという道筋です。しかしながら、このスローガンは、明治の文明開化以来百年の間掲げ続けられてきたものです。あと百年間 21 世紀の間中、掲げ続けるべきものなのでしょうか。

この点について、私が日頃考えている所を述べることをお許し頂きたく思います。

課題の二重性 独断その三

一般に、私達が解決を迫られている課題は通常二重の構造を持っているように思います。例えば、北海道の情報学の研究を高い水準に上げていくという課題を取り上げます。まず気付くことは、北海道が日本の中心地でないことです。そこで、地方にあるために生ずる障害を克服することに努力を払うこととなります。つまり地方性の条件に注目するのです。大抵はこれが唯一の方策になります。しかしながら、このような対処の仕方には、大切なことが一つ見落とされています。

よく考えてみますと、北海道全体の情報学の研究をアクティブにするという課題には、情報学の研究そのもの、日本の情報学の研究のみならず、世界の情報学研究が直面している課題もまた含まれているのです。すなわち、北海道全体の情報学研究活性化という課題は、地方性の克服および情報学自身の課題という二重の構造を持っています。追いつくことが第一、多くの場合は唯一の方策になっている場合には、事実上地方性の克服という課題にのみ関心が向いて、情報学自身の課題は大抵背後に消えてしまいます。さらにまた地方性の克服自身が次々と問題を提供しますので、結局は終始地方性の克服のみに奔走を重ね、いつまでも追いつく努力を重ねていくこととなります。21 世紀中追いつく努力を重ねて仕舞うことになることでしょう。このことは、別に北海道における情報学研究の活性化

だけに当てはまるものではありません。

したがって、当面北海道の情報学研究者が直ちに取るべき方策には、世界全体が直面している情報学の課題をそのままに、自分自身の課題とすることです。少なくとも、当面の方策のなかにこれを主要なものとして含まなければなりません。一方、日本および世界全体が直面する課題の解決によって、北海道の情報学研究は日本と世界の水準を追い越すこととなります。このことによって、北海道の研究水準は、日本と世界の水準に追いつくことになるでしょう。つまりこれは

「追い越すことによって追いつく」

という道なのです。堂下さんのお話を聞いていますと、今述べた北海道の情報学の研究の代わりに、日本の情報学の研究のために取るべき方策としても、全く同じことがいえるのではないかと思いました。

最近テレビで本田宗太郎が戦後百人の規模の従業員で発足したときの、創業式の訓辞を聞きました。彼はいいました。「この会社を日本一の会社にしよう。そのためには、まず世界一にしなければならぬ。」彼は「追い越すことによって追いつく」ことを語ったのです。

まとめのまとめ

以上、私がこのシンポジウムで最も強く感じたことをまとめのまとめとして申し上げておきます。

「社会情報学が独自の対象を持つことは今や明かである。人類社会の今後の在り方を、私達自身の考えに基づいて見い出すということが、社会情報学の今後にとって決定的なことである。」

この第二回シンポジウムもまた第一回のシンポジウムと同様立派に成功したということができましよう。大変お忙しいところを本シンポジウムにご出席頂き、きわめて内

容の豊かな示唆に富む学問的な報告を頂いたのみならず、討論にも熱心にご参加下さった堂下、平野、戸田の三先生に心から感謝申し上げます。また、田中譲、小林甫、沢田幸展の三人の方にはコメントをお願いしましたが、それぞれ貴重なご意見を頂きました。この他多くの方々に参加して頂いた上、熱心な討論を重ねて下さいました。本当に有難うございました。最後に、このシンポジウムを計画しその準備に当たられた狩野陽さんをはじめ、シンポジウム準備委員会の委員や、昨日と今日の裏方さんとしてこのシンポジウムを支えてこられた学務課の富井清美、松田昇一のお二人に心から感謝致します。